

史苑

第十四卷第三號 (通卷第六十六號)

昭和十七年二月

漢魏晉の玄菟郡と高句麗

池 内 宏

- 一 第一・第二兩玄菟郡と高句麗
- 二 高句麗の第二玄菟郡略取と第三玄菟郡
- 三 第三玄菟郡の没落と高句麗の新城
- 四 概 括

一 第一・第二兩玄菟郡と高句麗

玄菟郡は前漢の武帝の時、朝鮮半島内に置かれた四郡の一であるが、此の郡には其の後ち後漢・三國を経て兩晉時代に至るまでの間に、地理的並に歴史的の著しい變遷があつた。

前漢の武帝は元封三年(紀元前一〇八)衛氏の朝鮮國を討ち滅ぼし、其の地を分つて四郡となし、

漢魏晉の玄菟郡と高句麗 (池内宏)

中國に於けると同様なる郡縣制を布いた。四郡は即ち樂浪・眞番・臨屯・玄菟であつて、各々若干の縣が之に屬した。しかし四郡の統治は其のまゝの状態を以て永續せず、早くも次の昭帝の時には著しい變革を見たのである。即ち四郡開設の時から二十六年降つて昭帝の始元五年(紀元前八二)に至り、先づ眞番の二郡が罷められた。前漢書^{卷七}昭帝本紀の此の年の一條に「罷儋耳・眞番郡」とあつて、今の海南島に置かれてあつた南越の儋耳郡と共に廢止せられたのである。眞番郡の位置については、北在説と南在説とがある。北在説といふのは、鴨綠江の北方に屬する修佳江(渾江)の流域、即ち襄平(今の遼陽)を中心とする遼東郡——秦の始皇帝の時から存在した——の東方の分水嶺外にあつたとする説で、明治の末に發表せられた白鳥庫吉博士の説は、其の代表的ものである。これに對して問題の地方を全く反對の方面、即ち樂浪郡の管轄區域であつた平安南北道・黃海道・京畿道の諸地方を隔て、其の南方に屬する忠清道及び全羅北道の方面に擬てやうとするのは、大正五年に公けにせられた故今西龍博士の説であつて、所謂眞番南在説を代表してゐる。さうしてこれ等の兩説は其の後相ち互の論戰もなく、殆んど對立の形をなして今日に至つてゐるが、前者の主要なる部分が所謂形勢論であるのに對し、後者は相當有力なる文獻的證左を論據としてゐるから、余は北在説を否定して南在説に左袒する。又た臨屯郡は大體今の江原道に相當する地方であり、玄菟郡は咸鏡南道の咸興を中心とする當昔の沃沮の地方であつて、これ等の二郡の位置については、殆んど問題はない。それで昭帝の

始元五年に於ける變革は、前記の前漢書昭帝本紀の記事の示してゐる如く、たゞ南方の此の二郡が省かれただけで、他の三郡の存在には何の關係もなかつたのである。

然るに其の後七年、——四郡開設の後三十三年——同じ昭帝の元鳳六年(紀元前五)には、樂浪・臨屯・玄菟の三郡に對して著しい變革が加へられた。即ちこれ等の三郡は併合せられ、臨屯郡が全然其の名を失ふと共に、玄菟郡は別に遼東郡の東邊に新設せられた一郡の名稱となり、朝鮮半島内に於ける樂浪郡は南方の韓族の住地を除いて其の大部分を管轄する唯一の大郡となつたのである。たゞし此の時行はれた變革は、單にこれだけではなく、玄菟・臨屯二郡を併せた大樂浪郡の東邊、即ち故の二郡の一部であつた日本海沿岸の細長い地方——所謂嶺東七縣の地——を「東部」、黃海道、慈嶺山脈以南の部分——後の帶方郡の地——を「南部」となし、各々都尉の官を置いてこれ等の特別區域を分管せしめるやうにした。⁽³⁾ 又た三郡の併合と同時に遼東郡の東邊に置かれた玄菟郡は、其の名稱こそ四郡開設の時から三十三年間咸鏡南道の沃沮の地に存在した沃沮城(今の咸興)の玄菟郡と同じけれども、地理的には何の關係もなく、第二玄菟郡と稱すべき新郡であつて、高句麗・上殷台・西蓋馬の三縣を統べ、渾河の上流の一支なる蘇子河(漢代の南蘇水)の流域を以て其の管轄區域とした。さうして三縣中の高句麗は郡の首縣として郡治と所在を同じくし、其の地は蘇子河の上流に於ける興京老城の附近に比定せられるのである。⁽⁴⁾ 興京老城が清の太祖努爾哈赤の遼東進出以前の根據地で

あることはいふまでもない。

然らば昭帝の元鳳六年(紀元前七五)、臨屯・玄菟二郡の樂浪郡への併合といひ、第二玄菟郡の新設といひ、どうして此の頃かういふ著しい變革が行はれたかといふに、こゝに此の問題と相並んで、別に他の歴史上の大きな問題が存在する。それは全然確實なる文獻に徴することのできない高句麗の建國に關する問題であつて、本來夫餘の別派であるとせられてゐる高句麗、即ち北滿洲の阿什河(阿城縣)の地方を根據とする夫餘族から出たとせられてゐる其の高句麗が、いつ頃、どうして修佳江の流域に國を建てたかといふことである。さうして確實なる文獻に出て來る高句麗の名は、第二玄菟郡の首縣の稱としての高句麗(麗)が最初であるから、彼れと是れとを結びつけて考へてみると、二つの問題は都合よく解ける。即ち夫餘族の別派であるといふ高句麗が北滿洲から南下して東滿洲の修佳江の流域に國を建てたのは、第二玄菟郡の新設される直前に起つた事變であつて、實に此の郡の設置は遼東西部の遼東郡の前衛として、此の新興の勢力を制壓することを直接の目的としたものでなければならず、またそれと同時にに行はれた第一玄菟郡及び臨屯郡の樂浪郡への併合、並に樂浪郡の東部・南部兩都尉の設置も、高句麗の修佳江流域古據といふ新情勢に對處する爲めに、半島に於ける郡縣の統治を強化したものと解釋せられるのである。要するに四郡設置の後ち三十三年を経て、漢が既に七年前に廢した真番郡以外の三郡を併合し、同時に沃沮城の玄菟郡の稱を襲うた第二玄菟郡を遼東郡の東邊の地に新設したのは、東滿洲に於ける高句麗の建國を契機とする情勢の變化に即應した處置でなければならぬのである。かくして第一玄菟郡の廢止に伴つた第二玄菟郡の新設と、高句麗の建國との間には、極めて密接なる關係があるのである。

註

- (1) 東洋學報、第二卷、第一號(明治四十五年五月)、白鳥庫吉博士「漢の朝鮮四郡疆域考」。
- (2) 史料、第一卷、第一號(大正五年一月)、故今西龍博士「真番郡考」。
- (3) 加藤博士追善記念東洋史學說所出版稿「前漢昭帝の四郡廢合と後漢書の記事」、『滿鮮地理歷史研究報告』、第一六冊所載拙稿「樂浪郡考」第一章、第二章及び第六章の内、昭明縣の項。
- (4) 滿鮮地理歷史研究報告、第一六冊所載拙稿「遼東の玄菟郡と其の屬縣」。
- (5) 三國史記の年表に、高句麗の始祖東明聖王朱蒙の即位の年を前漢元帝の建昭二年(紀元前三七)としてあるけれども、これは必ず後世の史家の作偽であつて、信用を置くべき限りでなく、朱蒙も實在の人物でない(東亞學、第三輯所載拙稿「高句麗王家の上世の世系について」参照)。
- (6) 東洋學報、第二八卷、第二號(昭和十六年六月)、所載拙稿「高句麗の建國傳說と史上の事實」。

二 高句麗の第二玄菟郡略取と第三玄菟郡

南滿洲と北滿洲との境に近く位置する新京が、新興の滿洲帝國の國都となつた今日、朝鮮の日本海沿岸と新京との直接の聯絡は、咸鏡南道の清津或は羅津から北上して豆滿江を渡り、西に轉じて延吉・

敦化・吉林等の要地を通過する鐵道線に由るやうになつたが、上は先秦時代から下は明・清の近代に至るまで、滿洲の重心が遼陽方面に置かれてあつた過去の時代に於いては、これに相當する最も重要な交通路は、咸鏡南道の咸興を起點として修佳江及び渾河のそこの流域を經由するものであつたのである。咸興は城川江及び其の支流の貫流する肥沃なる平野を擁し、いふまでもなく半島の日本海沿岸に於ける隨一の要地であるが、こゝから西北に黃草嶺を踰え、長津江の流れる高臺を江に沿うて北に下り、舊鎮(舊長津邑)から西に折れて脊梁山脈の薛寒嶺を過ぎ、禿魯江の一支流の溪谷を下り、江畔の大邑江界を經由して鴨綠江の中流に於ける輯安(通溝)に達する。これは咸興平野と鴨綠江乃至修佳江の流域とを聯絡する唯一にして且つ自然なる通路であつて、輯安は高句麗の第二の國都——長壽王の平壤遷都以前の——丸都城一名國內城の所在地である。輯安から高句麗の最初の國都であつた修佳江畔の桓仁(舊名懷仁)に至り、それから更に東北に赴くと、蘇子河の源する分水嶺に達する、即ち東滿洲と南滿洲との境である。蘇子河の上流興京老城の附近は此の方面の要地であつて、第二玄菟郡の郡治の所在地であり、また清朝の發祥地でもある。蘇子河は渾河の上流の一支であるが、清初の高戰場として有名なる薩爾滸古城——萬曆四十七年太祖努爾哈赤が明の大軍を破つた——の傍を過ぎて渾河の本流に會する。其の合流點から渾河に沿うて少しく西に下つた處は撫順であつて、渾河の上流域に屬する山嶽地帯と奉天を中心とする大平野との境目に位し、清朝の撫順城、明代の同名の城

の殘壘の外、更に溯つては遼金時代及び高句麗時代の顯著なる遺蹟もある。さうして撫順から奉天を過ぐる道路は、南に下つて太子河の中流に於ける遼陽に聯絡するのである。遼陽は遼東地方の中樞、漢魏時代の遼東郡治としての襄平である。

日本海沿岸と遼東地方との直接の聯絡は、古來かういふ通路に依つて行はれてゐたのであるが、漢代の第一玄菟郡治も、これに代つて置かれた第二玄菟郡治も、共に此の交通線上に位したのは、特に注目すべきである。さうしてまた高句麗は前漢の昭帝の時、これ等の舊新兩玄菟郡の間に介在する東滿洲の修佳江の流域に一國を建設したのである。高句麗の其の後の歴史は、前漢末の王莽の時、驃といふ名の王があつて、莽の遣はし攀たしめた將軍に誘殺せられたといふ外、一世紀餘りの長い期間を通じて全然不明であるが、後漢の中葉に至つて始めて黎明期に入つた。即ち當時其の國の王位に居たのは宮といふ名の傑出した王であつて、頻りに漢の玄菟・遼東二郡の地を侵し、和帝の元興元年(紀元一〇五)蘇子河の流域に於ける玄菟郡を倒して其の地を占有した。因つて漢は次の年なる安帝の即位の年(紀元一〇六)、遼東郡の一部を割いて第三玄菟郡を設けた。

さて此の第三玄菟郡の中心は三國時代になつても變らなかつたが、吳志^{卷二}の孫權傳の註に引かれた吳書の逸文に依ると、それは襄平(遼東郡治、今の遼陽)の北方二百里(當時の里數)の處であつたといふのである。故簡内互博士が三國時代乃至西晉時代の玄菟郡治を奉天附近であらうとしたのは、

かくの如き文獻上の徵證に本づいたものであつて、實際吳書の所傳を憑據とする限り、方向並に里程の關係から、より以上の推定を下すことは到底不可能であつたのである。然るに其の後考古學的見地から八木契三郎氏の唱へられた所謂「撫順玄菟論」⁽⁸⁾は、近年に至つて遺物並に遺蹟の上から一層確實に證據だてられるやうになつた。即ち渾河の南岸に於ける鑛業都市としての今の撫順市の東邊の丘陵地(永安臺東公園)から早く八木氏の注目せられた漢代の平瓦や土器の破片のみならず、銅鏃・半兩・五銖錢等も出土し、殊に昭和十三年春には、或は赧手文を表はし、或は「千秋萬歲」の文字を陽刻した大形の瓦瑱の發見があり、剩へ釣魚臺と呼ばれる最北の丘陵(譽ヶ丘)には、靡げながらも朝鮮の樂浪郡治などに見られるやうな土壘の跡さへ残つてゐる。だから大體今の新市街の住宅區域となつてゐる永安臺の地が後漢の中頃から以後の第三玄菟郡治の遺址であるべきことは、殆んど疑ふべくもないのである。⁽⁹⁾

さて此の第三玄菟郡は蘇子河の流域の玄菟郡が高句麗の領内に沒した結果、新たに遼東郡の一部を割いて置かれたものである。統縣は郡治と處を同じくする高句驪縣——前の玄菟郡の首縣の名を踏襲した——の外に、高顯・候城・遼陽の三縣。高顯は撫順と奉天との略々中央に位する渾河の左岸に近き上伯官屯、候城は奉天附近、遼陽は今の遼陽ではなく、渾河と太子河との合流點の附近である。即ち郡の管轄區域は大體撫順以下の渾河の下流域の地を占めてゐたやうである。⁽¹⁰⁾随つて高句麗の發展に

對して漢の勢力の退縮を印した此の玄菟郡も、やはり上に説明した咸興・遼陽間の交通の幹線の一部を其の管區としたのである。一方第二玄菟郡を倒した高句麗は、蘇子河に沿うて列置せられてあつたらしい上段台・西蓋馬の二縣の代りに、本底及び南蘇といふ獨自の二城を設けて其の占領地を確保した。⁽¹¹⁾高句麗滅亡の際に至つて、南蘇・本底の二城と相並んで蒼巖城の名が初めて當時の史上に見え、それ等の相關的の位置から蒼巖城は興京老城の附近に擬せられるが、これも第二玄菟郡の故郡城の代りに置かれたものではあるまいかと思はれる。要するに後漢の中頃に於ける第二玄菟郡の沒落は、遼東方面に於ける高句麗の勢力の第一次の發展を意味するのである。

又た東方を顧みると、日本海沿岸の嶺東七縣の地は、後漢の初め樂浪郡の東部都尉の治を罷め、爾來七縣の土酋を縣侯に封じて、それ等の自治に委せてあつたが、高句麗が始めて此の地方に勢力を及ぼしたのも、宮王の在位の間であつたやうである。⁽¹²⁾

註

(7) 前出拙稿「高句麗の建國傳說と史上の事實」。

(8) 考古學雜誌、第三一卷、第二號(昭和十六年二月)所載拙稿「玄菟郡の屬縣高顯の遺址」。

(9) 滿洲歷史地理、卷一、頁九六—九八。

(10) 八木契三郎氏著、續滿洲舊蹟志(昭和四年刊)、頁一一—一一四。

(11) 渡邊三三氏著、撫順史話(昭和十三年版)、考古學雜誌、第二九卷、第一一號(昭和十四年十一月)、渡邊三三・齊藤武一兩氏

漢魏晉の玄菟郡と高句麗 (池内宏)

一〇四

「滿洲國撫順の古瓦に就て」。

(12) 考古學雜誌、第三〇卷、第七號 (昭和十五年七月) 所載拙稿「撫順の史蹟」。

(13) 前出拙稿「玄菟郡の屬縣高顯の遺址」。

(14) 滿鮮地理歴史研究報告、第一六冊所載拙稿「高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動」、頁一三一—一三二。

(15) 同上、頁一五八—一五九。

(16) 滿鮮地理歴史研究報告、第一六冊所載拙稿「樂浪郡考」、註第三。

三 第三玄菟郡の没落と高句麗の新城

後漢の末から三國の初めに互り、中國に兵亂の絶えなかつた間、襄平 (今の遼陽) を本據として遼東一帯の地方に獨自の勢力を振つてゐたのは公孫氏であるが、公孫度の子康は、軍を東方に出だして當時沸流水 (今の渾江即ち佟佳江) の流域にあつた高句麗の國都を殘破し、又た時の高句麗王伊夷模 (山上王延優) と王位を争つてゐた伊夷模の見拔奇を援けて内亂の波紋を大にし、伊夷模をして鴨綠江畔の丸都城 (今の輯安) への遷都を餘儀なくせしめた。さうしてかくの如く高句麗の勢力を制壓したばかりでなく、南は朝鮮半島にも手を伸ばして樂浪郡を掌中に收め、郡の南半、黃海道慈悲嶺山脈以南の部分の割いて新たに帶方郡を設け、中國の勢力の及ばなかつたのに乗じて跳梁跋扈してゐた韓族・濊族を伐ち、郡縣の統治を鞏固なる狀態に復した。公孫氏を討滅して遼東並に樂浪・帶方二郡の

地を領有したのは三國の魏である。魏は幽州刺史毋丘儉の名に依つて有名なる二回の東方遠征を遂行した。其の第一回の役、高句麗の國都丸都城は屠られたが、翌年更に起された第二回の役、國王位宮 (東川王) は遠く南沃沮 (咸興地方) に奔つたので、沃沮征伐が續行せられ、南沃沮に攻め入つた魏軍は、位宮を追撃して北沃沮 (間島地方) に至ると共に、別に樂浪・帶方二郡の太守は、當時高句麗に服屬してゐた嶺東地方の濊族の諸縣侯を降服せしめた。これは魏の廢帝曹芳の正始五・六兩年 (紀元二四四—二四五) の間のことであつて、魏の勢力は半島を風靡した。しかしかくの如く華やいた時代は甚だ短かく、詳しい事情も確かな年次も全くわからぬけれども、魏の正始の末を上限とし、西晉の初めに屬する武帝の泰始十年を下限とする二十五年ばかりの間 (紀元二四八—二七四) の或る機會に、魏の東方經略の反動としての高句麗の南侵と認むべき、史上に傳はらない事變は起り、樂浪郡の大同江以北の諸縣はもとにも其の影を潛めた。さうしてそれは西晉末に至つて全然本郡の覆滅する一段階をなしたのである。

西晉の末から東晉の初めに互り、遼西を本據とする鮮卑の慕容廆は晉の遼東郡の地を占領した。かくして晉の勢力の半島に及ばなくなつたのに乗じ、高句麗は樂浪郡を沒落せしめた。これは西晉の滅びる三年前 (愍帝建興元年、紀元三一三) のことで、時の高句麗王は美川王乙弗利である。又た東晉の元帝が新朝を江南に創めた後ち十數年、高句麗は前燕主慕容廆の死に伴つて起つた慕容氏の内訌

——麴の第四子慕容仁の叛——に際し、遼東に於ける第二次の發展の機會を得、慕容氏の領土の一部となつてゐた第三玄菟郡を侵奪した。これは高句麗の發展史上特に注目すべき顯著なる事件であるけれども、歴史の表面に現はれてゐないから、從來未だ明かにせられてゐない。これに關する詳しい考説は「晉代の遼東」と題した拙稿の中に述べたところに譲り、こゝには省略に従ふが、三國史記卷一高句麗本紀の一條に極めて簡単に「樂國北新城」と記るされてゐる高句麗故國原王五年(東晉成帝咸康元年、紀元三三五)の新城築設は、此の事實の一端に觸れたものである。さうして相距る四年の後なる成帝咸康五年(紀元三三九)の事實として、資治通鑑卷九に「慕容皝擊高句麗、兵及新城、高句麗王劉劉義熙乞盟、乃還」と見える前燕主慕容皝の新城攻撃は、高句麗から略取せられた玄菟郡の奪還を目的としたものに他ならぬ。

もつとも咸康元年(紀元三三五)に於ける高句麗の新城築設が、慕容氏の領土の一部であつた第三玄菟郡に對する高句麗の侵略、即ち後漢の中世以降撫順を郡治として存在した此の郡の没落を意味するといふのは、新城といふ高句麗の一城の的確なる位置を考慮に入れてのことである。新城の位置については、之を今の奉天或は撫順のあたりであらうとする故松井等氏。故箭内互博士及び津田左右吉博士等の説があつたが、いづれも専ら不十分なる文獻的の證據に本づいたものであつて、より以上の的確なる位置を決定することはできなかつた。然るに去る昭和八年、撫順圖書館長渡邊三三氏は今の

撫順縣の管内に存する北關山城を調査し、遺蹟及び遺物の上からそれが高句麗時代の山城の遺基であることを識り、之を前記の諸説に照らして此の山城を問題の新城に比定せられた。渾河の南岸に臨んだ今の撫順市の永安臺東公園には、既述の如く第三玄菟郡址が現存するが、北關山城は此の遺蹟と相對して渾河の北岸を北に去ること遠からざる清朝時代の撫順城の東北數町の處に位し、渾河の水流を挟んで相距る二十數町である。撫順城の南門外の地には南關、北門外の地には北關の稱があつて、山城の所在は北關に屬するから、かく呼ばれるのである。余は昭和十三年春、支那旅行の途次、此の山城を一見し、昨年(十五年)秋、更に精密なる考古學的調査を行つたが、渡邊氏の比定は動かすべからざるものであると信ずる。

撫順の北關山城が新城の遺基であつて、それと第三玄菟郡址との地理上の關係がかくの如くであるとするれば、新城は東晉の初期に屬する成帝の咸和九年乃至翌咸康元年(紀元三三四—三三五)高句麗の故國原王が第三玄菟郡を略有したのに伴ひ、其の故郡城に近き屈竟なる地點を擇んで新たに築設した山城でなければならぬ。新城といふ特別な意義のあるべき城名も、かう考へることに依つて始めて其の説明がつくのであつて、即ちそれは江南の玄菟城に對して新たに江北に築かれた城であるからであらう。換言すれば新城は玄菟の故郡城に對する高句麗自身の山城としての玄菟新城に外ならないのである。山城は現存する遺基其のものから見ても、要害堅固にして規模廣大であるが、其の築設が

此の方面の地勢上、玄菟の故郡城と相俟つて、高句麗の新占領地の守備を強化したものであることは、更めていふまでもない。

東晉の初期に於ける高句麗の新城築設の事情はかくの如くである。さうして此の城は爾來東晉から南北朝を経て隋唐時代に至るまで、遼東・遼西乃至北支那の地を領有する諸勢力と高句麗との抗争に關聯して、前に述べた高句麗の南蘇城・木底城等の諸城と共に特に重要な役割を働いたのである。一方玄菟の故郡城はどうかといふに、唐の太宗の貞觀十九年に行はれた高句麗親征の役に關して玄菟城の名が史上に見え、又た往年洛陽の邙山から出土した泉男生(高句麗末の權臣泉蓋蘇文の子)の墓誌にも男生の據つた城として其の名が見える。これは玄菟郡の最後のものたる第三玄菟郡の故郡城に外ならないのであつて、東晉の初期高句麗の領内に没して後も、なほ數世紀の間長く其の名と實とを存したのである。だから撫順の東公園の郡治址からは、漢魏時代の各種の遺物と交はつて、高句麗の瓦片も澤山發見せられるのである。

註

(17) 史苑、第二卷、第六號(昭和四年九月)所載拙稿「公孫氏の帶方郡設置と曹魏の樂浪帶方二郡」。

(18) 滿鮮地理歴史研究報告、第一二冊所載拙稿「曹魏の東方經略」。

(19) 前出拙稿「樂浪郡考」第七章。

(20) 資治通鑑、卷八八、愍帝建興元年四月の條。

(21) (邦文)帝國學士院紀事、第一卷第一號(昭和十七年四月)。

(22) 滿洲歴史地理、卷一、百三八九—三九二。同上、頁二三五。滿鮮地理歴史研究報告、第一冊、「安東都護府考」附錄一、「高句麗時代の新城、木底城及び南蘇城について」、頁九六。

(23) 渡邊三三氏著撫順史話。前出拙稿「撫順の史蹟」。

(24) 滿鮮地理歴史研究報告、第一六冊所載拙稿「高句麗討滅の役に於ける唐軍の行動」、頁一一七—一二八。

四 概 括

以上縷説したところは、漢代以來三たび處を異にして存在した玄菟郡と高句麗との關係についての考説の大略であつて、別に考察すべき東晉乃至南北朝時代の遼東に關する余の研究の序説である。今之を概括すると、前漢の昭帝の時、第一玄菟郡を樂浪郡に併合すると同時に、第二玄菟郡を蘇子河の上流に新設したのは、偶々高句麗が修佳江の流域に占據して、新たに一國を建てたからであつて、殊に第二玄菟郡の新設は、高句麗の勢力の制壓に直接の目的を置いたものであつたのである。然るに後漢の中世に於ける安帝の時に至り、高句麗は其の地を侵奪して、郡治を撫順に退却せしめた。撫順の玄菟郡は第三玄菟郡と稱すべきもので、三國を経て西晉の世を終るまで存續し、東晉の初め鮮卑の慕容氏の有に歸したが、高句麗は慕容廆の死後に於ける慕容氏の内訌に乗じて其の地を占有し、同じ撫順の地に新城といふ一城を築いて其の地の守備を強化した。即ち此の城は高句麗自身の玄菟新城として、別の立場に於いての玄菟郡の延長に他ならないのである。(昭和十六年十二月十一日)